

第12回 全国大会・研究発表大会 ベストペーパー賞 受賞記

森本祥一

このたびは、当方の論文をベストペーパー賞に選んで頂き、誠にありがとうございます。大変光栄に思います。審査にあられた先生方を含め、学会関係者の方々、大会参加者の方々に深く感謝致します。

昨年8月29日発行のメールマガジン No.11-05でも書かせて頂きましたが、私が担当するゼミナールは、2014年度より、新潟県南魚沼市にある辻又集落の活性化に携わっております。その2年間の活動記録を、昨夏、『大学生、限界集落へ行く―「情報システム」による南魚沼市辻又活性化プロジェクト』（専修大学出版局）として出版致しました。今回の論文は、この活動の研究的側面を、一貫して情報システム論に基づき考察し、発表したものです。浦先生、神沼先生、内木先生による著書『基礎 情報システム論―情報空間とデザイン』（共立出版）に出会い、私の研究者人生は大きく変わりました。「生活の基本にある情報システムは人間活動としてのコミュニケーションである」、「秩序ある人間関係の構築である組織化は、情報システムの形成そのものである」ということが書かれている情報システムの本は、どれだけ探しても日本では他にないかと思えます。集落活性化事業を受けた当初、ICTによって何とかできないかと模索していた時期がありました。しかし、問題の根本は、もっと別のところにあったのです。情報システムの原点に立ち返り、集落内の情報流通を再生するための活動を行い、少しずつですが成果が表れ始めました。

今大会のテーマは「富山から見える“地域社会と情報システム”の未来」ということもあり、辻又や私たちの活動、ひいては地域を変える力を持った情報システムの可能性を広く知ってもらえるチャンスであると捉え、発表させて頂きました。出版した書籍のタイトルには、世間一般に認識されている情報システムと異なることを示すため、「情報システム」と、敢えてカギ括弧を付けています。本受賞をきっかけとして、本来の情報システムの認識が広まり、この括弧がとれることを、さらに多くの地域で活力が戻ることを期待し、研究を続けていきたいと思えます。